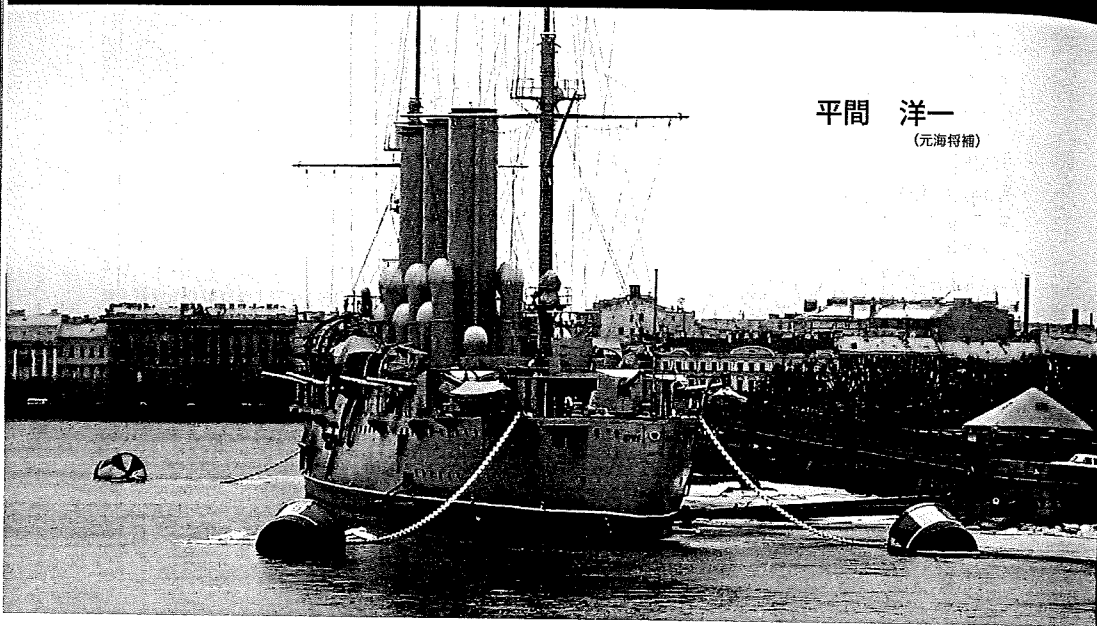


日露戦争100周年サント・ペテルブルグ国際会議に参加して

St. Petersburg Conference of the 100-Year of Russo-Japanese War by Yoichi Hirama



サント・ペテルブルグに保存されている記念艦オーロラ Aurora。今回の会議の会場となった。(筆者提供、以下同)

平間 洋一
(元海将補)

▶日露戦争100周年会議の概要◀

3月18日から21日までサント・ペテルブルグで、山梨学院大学が国際交流基金の支援を受け、ロシア海軍中央博物館(分館の革命記念艦オーロラ Auroraを含む)、ロシア科学アカデミー東洋学研究所やサント・ペテルブルグ大学の協力を得て、日露戦争100周年を記念する国際会議が開かれた。参加者は日本、ロシア、イギリス、中国、フィリピンの5カ国から約40名であった。

第1日目はロシア海軍中央博物館中央ホールで行なわれ、博物館館長E.H. コールチャーギン中将、山梨学院大学学長代理の我部政男教授の挨拶、次いで開戦前夜のセッションがコールチャーギン海軍中央博物館長の司会で、山梨学院大学教授コンスタンチン・サルキソフの「日露戦争は回避できたか? 開戦前夜の東アジア情勢」、ロンドン大学名誉教授ジャネット・ハンターの「開戦前夜の日露経済」が発表された。

第2セッションの日露戦争の部は、ロンドン大学名誉教授イワン・ニッシュとサルキソフ教授の司会で、東京大学名誉教授・和田春樹の「日本における日露戦争についての研究動向」、ロシア国立公文書館長ウラジミール・

ソブレフの「ワリヤグ号とコーレツ号の受難と救助」、熊達雲(中国人・山梨学院大学教授)の「中国メディアからみた日露戦争」と、リカルド・ホセ(フィリピン大学教授)の「日露戦争とフィリピン」、我部政男教授の「写真に見る日露戦争」、ロシア海軍中央図書館研究員ウラジミール・アンドリエンコの「日露戦争下のシベリア鉄道とバイカル航路」、中央海軍博物館研究員セルゲイ・クリモフスキーの日本海軍が敷設した機雷で旅順港外に爆沈した「ペトロパブロフスク号をめぐる考察」、ロシア海軍公文書館副館長マリナ・マレヴィンスカヤの「日記にみる日本軍のロシア人捕虜」などの論文が発表された。

第2日目のセッションは革命記念艦オーロラで筆者の司会で行なわれ、海軍博物館首席研究員コンスタンチン・グバーの「日本海海戦におけるロシア将兵の運命」と、オーロラ艦長ゲオルギー・アブラモフ中将の「オーロラ号と日露戦争遺族会の活動」、次いで記念艦三笠保存会副会長の沖為雄元海将の「三笠の歴史と三笠を通じた日露交流の現状」が紹介された。

元海上自衛官として特に共感と同情を覚えたのは、グバー氏の「日本海海戦におけるロシア将兵の運命」であ

った。バルチック艦隊には約千名の士官が乗艦していたが、病気などで死亡あるいは病院船に移され、あるいは補給艦艇乗組のため上海などに回航され、日本海海戦に参加した士官は668名であった。そして、海戦に参加した士官の3分の1の213名が戦死し、2分の1弱の297名が捕虜となった。生存者や捕虜となった455名は帰国後に再び軍務に帰したが、3~4年後には127名が負傷や病気で海軍を去った。

残りの士官は第1次大戦で再び戦ったが、大戦後期に革命が起きると、貴族など上流社会出身者の多い海軍士官は、白軍としてレーニンの革命軍と戦った者が多かった。このため革命政権が樹立されると、ロジェストウェンスキー中将など106名が国外に亡命し、さらに残った士官も1938年から39年の粛軍により20名が粛清されたという。同じく祖国を愛し第2次大戦を戦い、敗戦後に公職追放令を受けて職を失った父を持つ私には、ロシア海軍士官の苦難の歴史が自身の体験と重なるだけに胸の痛む報告であった。

次いでポーツマス講和のセッションはサルキソフ教授の司会で、イワン・ニッシュの「講和条約の履行 1905年11月~12月の北京会議」、法政大学教授・下斗米伸夫の「ポーツマス講和 戦後における日露関係 1905~1917年」の論文が発表された。

午後には本会議で最も注目されていたオーロラ艦長アブラモフ中将と記念艦三笠保存会代表沖元海将のスピーチと記念品の交換が、また日露戦争で戦没した遺族や捕虜の子孫の代表、さらにはバルチック艦隊司令官ロジェストウェンスキー中将の曾孫ジノビー・スペチンスキー夫妻と、東郷平八郎元帥の曾孫の保坂宗子夫妻と、日露戦争100年後に曾孫同士の歴史的和解の握手とスピーチがあった。保坂氏は「曾祖父は国を守るためにロシアと戦いましたが、ロシアの人々を憎んでいたわけではありません。曾祖父は心(誠実)と人を大切にした人です。一世紀という歳月が人々の心の傷を癒し、ロシアの子孫の方々と心を開いて交流ができますならば素晴らしいと思います」と述べた。

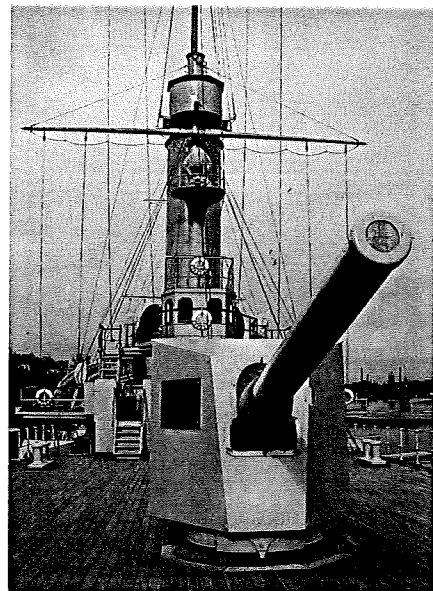
一方、曾孫のスペチンスキー氏は「戦争は悲劇をもたらしたが、もはや歴史の話。自分が生きている間にまさ



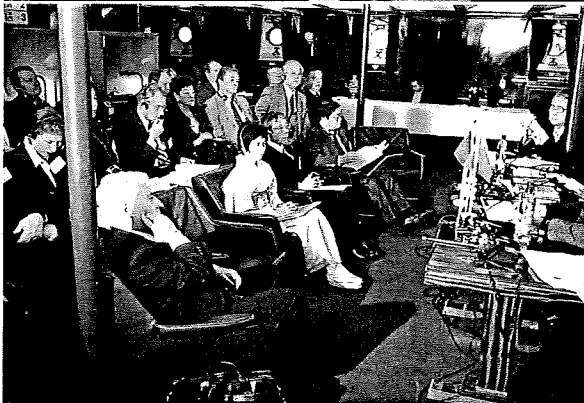
各国の会議参加者。中央左手の和服の女性が東郷元帥の曾孫の保坂氏、右端が筆者である。

かこんな出会いがあるとは思ってもみなかった。日本は私の意識の奥底にありながら遠い存在だった。両国の将来の平和と友好を誓って、今後も交流を続けていきたい」と語った。

次いで日本側代表团は、サント・ペテルブルグ大学に移動し、日本語を学んでいる学生を対象に保坂氏が「東郷元帥と武士道」の講演を行なった。この講演で保坂氏は自身が剣道を学んでいる体験から、日本の武士道の神



記念艦オーロラの前甲板。15.2センチ単装砲が印象的である。



会議の様相。上2葉は初日にロシア海軍中央博物館、3葉目は2日にオーロラの館内における撮影。

随は「心技体の一致」にあると語った(156～157頁参照)。しかし、武士を「サムライ」と訳してしまう外国人には「心技体」ということ、特に「心」をどう訳すのか、通訳をかって出たサント・ペテルブルグ大学東洋学部の日本文化を教えている教授もかなり苦戦していた。

最後の会議は社会思想史博物館(旧レーニン革命記念館)の錦絵的な絵画(戦意高揚のための絵)の特別展示室で行なわれたが、自国の勝利を誇張する絵画が多く、題材や表現など「日本と変わらない」との印象を受けた。ここでこの会議は日露戦争が与えたインパクトを中心に山梨学院大学助教授・小菅信子の司会で、筆者が「日露戦争の世界史的意義 アジア主義・共産主義・モンロー主義の百年」、東京女子大学教授・黒沢文貴の「戦勝のインパクト 国際環境の変化と日本の軍部」、山梨学院大学教授・山本武彦の「日露戦争と日本の民衆——戦勝をもたらしたもの」を発表した。

筆者は日露戦争の日本の勝利がアジアやアラブ民族に人種平等、民族国家独立の夢を与えたが日本は敗北した。しかし、引き続いて米ソ対立の冷戦が始まると、ソ連が日本の掲げた民族国家独立運動を支援し、アジア・アフリカに多数の有色人種の国々を独立させたと、共産党独裁による内乱や反対派の弾圧や亡命などには触れず、外交的配慮を加えて日ソ関係100年の歴史を総括し結んだ。

次のセッションでは「過去の教訓と未来への展望」をテーマに、ロシア科学アカデミー東洋研究所コンスタンチン・ジュジュコフの「エミール・デイロン、ジョージ・ケナンの日露関係」、サルキノフ教授の「21世紀における日露関係の新地平」が、また、ケンブリッジ大学講師フィリップ・トゥルの「ポーツマス講和再考」が発表された。そして保坂宗子氏による「日本とロシアを結ぶ心」、小菅信子助教授の「グローバル化時代の日露和解」の発表があり、最後に帰国早々のパノフ元駐日大使の「日露関係の現状と将来」に関する講演があり会議は終わった。

▶会議に参加しての所見◀

この国際会議の特徴は、単に学者による論文の発表や討議にとどまらず、日露の和解を前面に東郷元帥の曾孫である保坂宗子氏、記念艦三笠副会長の沖為雄氏などを加え、「日露和解」の各種の行事が会議と並行して行なわれ、それがこの会議の「日露和解」の深化という目的を大きく前進させたことである。ロシア海軍も海軍中央博物館では日露戦争100周年を記念した特別展示を行ない、遺族や捕虜の子孫、特にロジェストヴェンスキー中将の子孫も出席した。

われわれも会議終了翌日に日露戦争で戦死したロシア将兵を祀るニコライ教会(日露戦争の戦死者のために1907年建立)の慰霊追悼ミサに参加し、また海戦で沈没した戦艦アレクサンドル3世Alexander III慰霊碑に献花した。ミサはニコライ教会の大司教が執り行ない聖歌隊が合唱するなど荘厳に行なわれ、ミサ終了後に大司教が保坂氏にロシア式の親愛の頰付けを行なうなど親愛の情を示した。

また、この会議にロシア側がいかに関心と熱意を示したかは、海軍中央博物館、記念艦オーロラ、社会思想史博物館、サント・ペテルブルグ大学などが協賛し、それらの機関を順番に廻って会議や行事が行なわれたことから理解できるであろう。このように、この会議は日露親善に大きく寄与した。しかし、詳細に見てみると日本側が学術交流と日ソ親善を第一とし、ロシア側は「不名誉な海戦」と位置付ける日本海海戦に触れることを避け、ロシア海軍中央博物館の展示も、記念写真集も「日露戦争と旅順のロシア海軍の戦闘(写真)」と旅順を中心とするものであった。未だロシア海軍には日本海海戦を歴史の中に入れるのには抵抗があるのかもしれない。また、ロシア側の研究者との交流を通じて感じたことは、愛国史観や大國史観の強さであった。

また、歴史を通じた日露関係の和解と親善の深化を求めるならば、会議で日露戦争だけでなく、第2次大戦末期のソ連の不法な対日参戦や、国際法に違反して61万人もの兵士を長期間抑留し、6万2,000人が生命を失い、未だ1万3,000人の死亡も確認されていないシベリア抑留の悲劇や、日本が降伏文書に調印後にも進撃を続け、ソ連軍が停戦したのは固有領土の国後島や択捉島を占領した9月5日であった事実などにも触れるべきではなかったか。

しかし、両国の和解を重視したため日露双方に、そのような雰囲気はなかった。最後のセッションでパノフ元大使が、沖縄の米軍基地はアジアの平和に有害であり、



日露戦争で戦死したロシア将兵が祀られているニコライ教会。

日本はアメリカから自立し、国境を接する中露などの近隣諸国との親善を重視すべきである。日露間には平和条約も締結できず領土問題もあるが平穏である。しかし、親密ではないと締めくくったが、これが日露関係の現実かも知れない。

しかし、この会議が行なわれていたときにモスクワでは、知られざる自国の暗い歴史の一部を学んで未来に役立てようと、国立東洋学研究所の学生が「シベリア抑留写真展」を開催していた。また、サント・ペテルブルグ大学の講演後に、日本語を勉強するようになった動機を尋ねたところ、11名の学生中3名が日本に住んだり、日本を訪問したことを挙げた。このようなことから、日露の市民レベルの交流が広がり深まれば、日露の真の理解が進み和解へと連なるかも知れない。また、それを願って筆を擱きたい。

日本海海戦100周年論文を募集!



日本海海戦百周年記念大会実行委員会では、「日本海海戦に学ぶ」のテーマで論文を募集しています。詳細は下記のとおりで、締切は平成16年12月15日です。

枚数：ワープロ書き1行40文字36行で6枚以内
賞金：最優秀作20万円、優秀作10万円、佳作3万円
提出/問合せ先：ホームページ= <http://100z.jp/>
〒150-0001 東京都渋谷区神南1の5の3
財水交会内 日本海海戦百周年記念大会実行委員会
☎03-3403-1491 Eメール= suikoukai@nifty.com